

# ブッダは眠らない

## —インド仏教説話に見られる「夢」の用例—

平岡 聡\*

### 0. 序

2003年1月31日、京都文教大学・人間学研究  
所主催で「夢」に関するシンポジウムが開催され  
た。これは神奈川大学助教授・岡崎彰（文化人類  
学）が「夢は『自然』か『文化』か：スーダンの  
ある社会の事例から人類の夢のナゾを考える」  
と題して発表を行い、それに対して本学教授・鑑  
幹八郎（臨床心理学）がコメントするという形式  
をとった<sup>(1)</sup>。本学は人間学部文化人類学科と  
臨床心理学科とを設置するユニークな学部構成  
としてスタートしたが、そこに併設されている  
人間学研究所は、この両学問の学際的研究を推  
進する役割を担っており、このシンポジウムは  
まさに本研究所の趣旨に添った企画になったと  
言えよう。

一般に「夢」と言えば、臨床心理学の研究領域  
という印象を与えるが、岡崎はその夢を文化人  
類学の立場から考察し、夢が文化人類学の研究  
対象でもあることを見事に提示した。夢という  
題材を通して学際的研究が推進されるなら、仏  
教を建学の精神とする本学においては、その資  
料として仏教の典籍に説かれる夢の事例もその  
考察対象として欲しいところだ<sup>(2)</sup>。

ところが残念なことに、中国仏教や日本仏教  
はともかく、その源流となるインド仏教の典籍  
はサンスクリット語（古代インドの標準語）や  
パーリ語（その方言の一種）といった難解な言語  
で伝承されていること、またそのすべてが和訳  
されている訳ではないこと、などの理由から、仏  
教を専門としない研究者にとっては、そのアク  
セスが極めて困難な状況にある。そこで本稿で

は、インド仏教説話に見られる夢の用例を紹介  
し、若干の考察を行う<sup>(3)</sup>。

### 1. 仏教と夢

仏教と夢で連想されるのは、河合（1987）の研  
究であろう。これは鎌倉時代の明恵という一僧  
侶の書き記した夢日記を臨床心理学の見地から  
分析したもので、極めて興味深い内容となっ  
ている。この他にも日本仏教における夢の事例は  
かなり豊富で、例えば浄土宗の宗祖・法然が中国  
唐代の僧で自らの精神的な師と仰ぐ善導と夢の  
中で出会った話とか<sup>(4)</sup>、また法然の弟子・親鸞  
が夢の中で観音菩薩のお告げを聞いた話などは  
特に有名である。しかしながら、これがその源流  
であるインド仏教の夢の話となると、その内容  
はほとんど知られていないのが実状ではなかろ  
うか。そこで、本稿では実際のインド仏教説話  
に見られる夢を紹介し、若干の考察を試みるが、  
その前に、夢との関連で仏教という宗教を捉え直  
してみたい。

というのも、仏教は「目覚め」の宗教であるか  
らだ。仏教とは文字通り「仏の教え」であるが、  
この「仏」とは「仏陀」の略であり、「仏陀」と  
はサンスクリット語の *buddha*（パーリ語も同じ  
語形）を中国人が漢訳する際に音写したもので  
ある。言語的に言うと、*buddha* は「目覚める」を  
意味する動詞√*budh* の過去受動分詞で、「目覚  
めた」という形容詞であり、これが名詞化されて  
「目覚めた人」を意味するのであるから、仏教と  
は「目覚めた人の教え」という意味になる。つま  
り我々が現実だと思いこんでいるこの現実  
は、「ブッダ（目覚めた人）」からすれば、実は夢の  
世界そのものなのであり、真理に目覚めてその夢

\* 京都文教大学・臨床心理学科助教授

から覚醒せよと仏教は説く<sup>(5)</sup>。

真理に目覚めることで我執を離れ、様々な欲望の対象に執着することを止めると、それまでの自我を中心とした世界が夢のように追憶されるのであり、この価値観あるいは自己の存立基盤のコペルニクス的転回が「覚醒」という感覚で意識されるのであるから、我執を離れ、執着を捨てた人を「ブッダ（目覚めた人）」と呼ぶのである。病跡学的な観点からも、釈尊がどのような夢を見たかは実に興味ある点であるが、残念なことに仏典は、ブッダとなった後の釈尊が夢を見たという話を出さない。あるいは出せないのだ。なぜなら、「目覚めた人」が「夢を見る」ことは論理的に矛盾する<sup>(6)</sup>と考えられたからだと推察される<sup>(7)</sup>。

さて、釈尊の時代から時を四百年ほど経過したところに興ったとされる大乘仏教になると<sup>(8)</sup>、「目覚めた人の教え」である仏教が夢を重視するようになり、夢を通して深い宗教体験が語られるようになる。特に浄土教においては「夢中見仏」が説かれるようになるが<sup>(9)</sup>、その背景を歴史的に概観してみよう。

初期仏教以来の考えによると、釈尊の後は、彼の死後五十六億七千万年先に登場するとされるマイトレーヤ（弥勒）仏を待たねばならず、したがってこの間は仏が一人もいない「無仏の世」ということになる。ところが、無仏の世に生を受けた人々にとっては、そんなに長い間、次の仏の登場を待つてはいられない。彼らにとっては新たな救済者が一日も早く出現することを望んでいたことは想像に難くない。このような人々の心情が次の仏の登場を渴望する土壌を先ず形成したと考えられる。

また、初期仏教以来の仏陀観は一世界一仏論を原則とし、「一つの世界に二人の仏が出現することはあり得ない」<sup>(10)</sup>と考えられていたため、よけいに未来仏のマイトレーヤ以外には仏の出現を期待することはできなかった。しかし、ある時期、仏教の世界観に大きな変化が見られ、この世界以外にも世界は存在すると考えられるようになる。これが結果として三千大千世界<sup>(11)</sup>という膨大な世界観に発展していくが、するとどうな

るか。世界は複数存在するのであるから、「一世界一仏論」の原則に抵触することなく、複数の現在仏の存在を認めることができ、無仏の世と思われていたこの世界に仏の出現を期待することが可能になるのである。

こうして、無仏の世に新たな救い主としての仏を渴望する土壌に、発展した世界観が加わり、大乘仏教に至って新たな複数の仏の出現を見ることになるが、その代表が阿弥陀仏と言えよう。無論、阿弥陀仏は釈尊と違って歴史上の仏ではないから、実際に肉眼で出会うことはできない<sup>(12)</sup>。つまり、阿弥陀仏はそのような新たな仏を真摯に求める人が作り出す「イメージ」であるから、その出会いの場はさしずめ「瞑想」あるいは「夢」といったファンタジーの中か、あるいは「臨終」という極限状態に限定されてくる<sup>(13)</sup>。こうして夢の中で仏に出会うことが深い宗教体験となり、夢中見仏が重要な意味を持つことになるのである。

以上、初期仏教から初期大乘仏教における夢の変遷を簡単に辿ってみたが、次はインド仏教説話に現れる具体的な夢の内容を紹介していく。

## 2. インド仏教説話に見られる夢

インド仏教説話には数多くの夢の用例が指摘できるが、以下、(1)予知夢と(2)夢枕の両面から用例を紹介していく。

### (1) 予知夢

#### ① 釈尊の母マーヤー

マーヤーが見た予知夢の用例を取り上げよう。釈尊の伝記（以下、仏伝）<sup>(14)</sup>によれば、彼女は白い象（資料によっては六牙を有する白象）<sup>(15)</sup>が体内に入った夢を見て釈尊を懐妊したと言われているが、現存する資料の中で、その夢の解釈までを説く二つの資料を見てみよう。まずは『マハー・ヴァストゥ』である。

さて、その瞬間、勝者の母は、最上の異熟果を持つ彼を夢に見た。白銀の如く〔輝き〕、六本の牙を持ち、見事な足と愛らしき鼻を具

え、頭が真っ赤に染まり、軽やかに歩き、体の繋ぎ目は申し分のない最高の象が彼女の腹に入った (Mv. ii 8)。

この後、妃にこの夢の内容を告げられた王は占い師を呼んでこの夢を占わせる。

「私自身、古の師匠達から学んだところによると、勇敢な獅子の如き人よ、彼には二つより他に道はありません。もしも彼が家に留まれば、財宝に満ち、偉大な権力を有し、常に勝利と結びつき、百千もの王を従者とする王になるでしょう。しかし、もし彼が出家して偉大な四洲<sup>(16)</sup>を捨て去るならば、全能の天人師ブッダとなるでしょう」(Mv. ii 12)<sup>(17)</sup>

つづいて根本有部律破僧事である。ここでは六本の牙を持った白象に加え、マーヤーが全部で四つの夢を見たと言われる。

さてマハーマーヤーは、(1)六本の牙を持った白象が私の胎内に割って入った、(2)上空を飛んでいる、(3)高い山に登っている、(4)大勢の人々が私に礼をしている、という四つの夢を見た。彼女はシュッドーダナに〔夢の内容を〕告げると、王は大臣達に「お前達よ、夢に精通したバラモンの占い師達を呼んでこい」と命じた。そこで彼らは夢に精通したバラモンの占い師達を呼んできた。そして王は彼らに夢のことを知らせると、彼らは言った。

「王よ、書を見てみますと、彼女は三十二の偉人相<sup>(18)</sup>で見事に荘厳された息子を生むでしょう。もしも家を持ち、家に留まるであろうなら、転輪王になるでしょうし、もしも髪と髭とを剃り落として袈裟衣を身に纏い、正しい信仰を以て家持ちから家なき状態へと出家すれば、如来・阿羅漢・正等覚者<sup>(19)</sup>になり、その声は世間に轟くでありましょう」と (Sbh. i 40-41)。

このように、若干の相違はあるが、全体としては同じ内容の説話と見なすことができる<sup>(20)</sup>。

## ②釈尊の親族（出家前夜）

つづいて釈尊の親族（父シュッドーダナ・養母ブラジャーパティー・妻ヤショダラー）が見た

予知夢の内容を紹介する。これは釈尊が出家する直前に家族の者が見た夢で、釈尊が出家して悟りを開くことを暗示する予知夢である。まずは『マハー・ヴァストゥ』の用例からであるが、ここでは彼らが見た夢を、神々が解釈するという形式で話が進行する。各自の夢の内容とその解釈は次の通り。

### (a)父王シュッドーダナ

夢「私は夢で、珠寶の網で覆われた最上の象を見た。象は宝石の沐浴場から現れ出ると、町の中央にある道に留まっていたが、夜になると走り回り、最上の町を揺れ動かした。その象を見ると私は夢の中で大笑いしたが、〔夢から覚めて〕起き上がると大泣きした。私の体は震え、痛みを覚え、内的苦悩を激しくした。＜今日は一体何があるのだろうか＞〔と考えて〕」(Mv. ii 133-134)

解釈「多くの人々を目覚めさせるために、彼（釈尊）は出現されたのだ。かの偉大な徳の保持者は、〔自分の〕王国、四人の身内、そして裕福な一族を捨て去り、疑うべくもない最上の〔王〕権を顧みず、最上の町から出て行くだらう。そのように〔夢の意味を〕知るがよい。彼が出家すれば、多くの種類の苦を征服するだろう。これが、夢の中で〔汝が〕笑った本当〔の意味〕である。その時、汝は夢の中で泣いたが、それは敵の集団（煩惱）を征服した勝者（釈尊）のことを聞けば、無限の樂が現れる〔という意味である〕」(Mv. ii 134)

### (b)養母ブラジャーパティー

夢「黄金の山の如き容姿をした、高貴な雄牛を私は夢で見ました。体は白く、〔肩の〕隆肉は非常に美しく、角は沢山で、動きは妖艶であり、体は豊満でした。その雄牛は非常に甘美な声で啼き、心が注視する道を取りながら、カピラヴァストゥから出ていきましたが、誰もその啼き声を上回る声で啼くことはできませんでした。その雄牛は花の山の如く高貴だったのです」(Mv. ii 134)

解釈「その行いは極度に清浄であり、善を具足し、理解力と記憶力とを具え、儀軌を知る

最上の獅子の如き人(釈尊)は、町と〔その〕人々とを捨て去ると、出家して雄牛の如き人の位を志求する。また、清浄なる眼を持つ、かの大仙は、不死・不動・不失・不震にして比類なき涅槃を指し示すと、獅子の如き人の叫びを聞いて、外道の輩は方々に退散するのである」(Mv. ii 135)

(c)妻ヤショードラー

夢「一瞬のうちに雲がシュッドーナ王の宮殿の周囲をぐるりと取り囲み、強烈な雲が、凄い音を立て、雷を燈としながら、三界<sup>(21)</sup>を何度も照らし出したのです。その雲は、涼しくて、無垢であり、比類なく、澄み切った、雨水を降らせると、甘美な音を立てました。海水を含んだ雲は、夏なのに雨を降らせたのです」(Mv. ii 135-136)

解釈「愛らしい眼をした、このシュッドーナの息子(釈尊)は、三界に雨を降らせる雲の如く、猛烈な〔煩惱の〕熱に焼かれている人々を喜ばせるのだ。堅固なる法と無比なる大悲とを生じて」(Mv. ii 136)<sup>(22)</sup>

次に根本有部律破僧事の用例を見てみよう。

ここでは『マハー・ヴァストゥ』のように父王の夢には言及しない。また『マハー・ヴァストゥ』のように神々がその夢を解説する件もないが、複数の夢の内容に言及する。

マハープラジャーパティーは四つの夢を見た。(1)月が〔悪魔〕ラーフ<sup>(23)</sup>に飲み込まれる、(2)太陽が東方から出たが、その同じ東方に沈んでしまう、(3)大勢の人々が自分に礼拝している、(4)自分が笑っている、という夢である。ヤショードラーは八つの夢を見た。

(1)自分の母方の家系が断絶する、(2)目出たい寢床が壊れる、(3)腕輪をつけた腕が折れる、(4)牙齒が砕け散る、(5)編んだ髪が下に落ちる、(6)家から幸せが逃げていく、(7)月がラーフに飲み込まれる、(8)太陽が東方から出たが、その同じ東方に沈んでしまう、という夢である(Sbh. i 82)。

マハープラジャーパティーの夢に関しては、何も説明がなされない。一方、ヤショードラーはこの夢を夫の釈尊に告げると、彼は彼女を慰め

るために次のような説明をする。

「お前は自分の母方の家系が断絶したと言ったが、今、ちゃんと存続しているではないか。お前は自分の目出たい寢床が壊れたと言ったが、それも現実には壊れていない。お前は腕輪をつけた腕が折れたと言ったが、自分の目で折れているかいけないか確かめてみなさい。お前は牙齒が砕け散ったと言ったが、それも各自で知るべきことだ。自分の目で折れているかいけないか確かめてみなさい。お前は編んだ髪が下に落ちたと言ったが、それも各自で知るべきことだ。自分の目で落ちているかいけないか確かめてみなさい。お前は家から幸せが逃げていったと言ったが、女性にとって夫こそが幸せだ。そして私はちゃんとここにいる。お前は月がラーフに飲み込まれたと言ったが、あの月は現に見えるではないか。お前は太陽が東方から出たが、その同じ東方に沈んでしまったと言ったが、今は真夜中だ。昇ってもいないのに、どうして沈んだりしようか」(Sbh. i 83)

しかしこれはあくまで妻を慰める言い訳であり、実際に釈尊は<ヤショードラーがそのような夢を見たということは、今日、必ず私が出家することだ>(MSV vi 83)と心中で呟いているので、養母および妻が見た夢は、実は釈尊の出家を暗示した夢ということになる。

③釈尊(出家前夜)

直前に見た用例は最後に釈尊自身が見た夢の話が続いている。以下、現存する資料では釈尊が最後に見たことになっている夢の内容を見ていこう。まずは根本有部律破僧事の用例から。

菩薩も五つの夢を見た。(1)大地が自分の寢床となり、山の王スメール全体が枕になり、左腕が東の大海に入り、右腕が西の大海に入り、両足が南の大海に入る、(2)沢山の草が立ったまま臍から出てきて、それが天空にまで達して留まっている、(3)頭は黒い真っ白の鳥が〔自分の〕両足に平伏し、膝まで飛び上がってくる、(4)様々な色をした鳥が四方から飛んできて、〔自分の〕前に留まるとそれが同じ色になる、(5)不浄物の山の上で

自分が散策している、という夢である。彼はそのような夢を見て、<このような夢を見たのは、私は久しからずして無上智を獲得するのだ>と考えた。(Sbh. i 83-84)。

最後に釈尊自身が考えているように、この五つの夢は彼自身の出家を暗示していることになる。この資料はこれ以上、各五つの夢の分析をしないが、この話はパーリ語で伝承されている初期經典『増支部』(AN iii 240-242)ですでに説かれており、そこでは各夢の分析がなされているので、その用例を見てみたい。全文を引用すると長くなるので、要点のみを略説する。文脈は悟りを開いた釈尊が成道以前に見た自分の夢とその意味とを仏弟子に説くという形式になっている<sup>(24)</sup>。以下、夢の内容とその解釈を纏めると次の通り。

- (1) 大地を大床、ヒマラヤ山を枕とし、東の海に左腕、西の海に右腕、南の海に両足を置いて横たわる。⇒ 自分が無上正等菩提を正等覚する。
- (2) 臍からティリヤー草が生え、空中に広がって立っている。⇒ 自分が八支聖道<sup>(25)</sup>を覚って、それを神々と人々に明示する。
- (3) 足先より膝頭まで、黒い首をした白い虫が這い上がってくる。⇒ 多くの在家者(白衣を着る者)が死ぬまで自分に帰依する。
- (4) 色の異なる四羽の鳥が四方よりやって来て、足下に降りると純白になる。⇒ クシャトリア・バラモン・ヴァイシャ・シュードラの四姓が自分の宣説した法と律とにおいて出家し、無上なる解脱を証得する。
- (5) 糞で出来た大きな山を上にと散策するが、足が糞で汚されない。⇒ 衣・食事・臥具・座具・病気を治すための薬といった資具を在家者から布施されても、自分はそれに執着せず、正気を失わずに受用する。

またこれと同内容の話が若干のヴァリエーションを伴って、『マハー・ヴァストゥ』(Mv. ii 136-139)に見られる。同じ要領で、夢の内容とその意味を纏めてみよう。文脈は先と同じである。

- (1) 大地を大床、ヒマラヤ山を枕とし、東の海に左腕、西の海に右腕、南の海に両足を置いて

横たわる。⇒ 自分が無上正等菩提を正等覚する。

- (2) 丸い臍からクシリカー草が生えて天空に届く。⇒ 三転十二行相という無上の法輪(四聖諦)を説く。
- (3) 足先より膝頭まで、黒い首をした赤い虫が這い上がってくる。⇒ この世で多くの人々が私に恭しく仕えてから、死んだ後に善き境涯に赴き、神の世界に生まれ変わる。
- (4) 色の異なる四羽の鷺が四方よりやって来て、自分の足裏にキスすると足裏は純白になる。  
⇒ クシャトリア・バラモン・ヴァイシャ・シュードラの四姓が私のもとで梵行を修し、解脱を得る。
- (5) 糞で出来た大きな山を上にと散策するが、足が糞で汚されない。⇒ 衣・食事・臥具・座具・病気を治すための薬といった資具を在家者から布施されても、自分はそれに執着しない。

#### ④ 釈尊(過去世物語)

ここまでは釈尊の現在世における夢の用例を見てきたが、ここでは釈尊の過去世における夢の用例の一つを紹介する。これは釈尊が仏教の修行を始める起点になった燃灯仏授記物語<sup>(26)</sup>での用例である。ここで釈尊はスマティと呼ばれる青年バラモンであるが、『ディヴィヤ・アヴァダーナ』第18章<sup>(27)</sup>によると、彼は次のような夢を見る。

スマティは十の夢、[すなわち](1)大海[の水]を飲み、(2)大空を飛び、(3)あれほど偉大な力と威力とを持つ太陽と月とを掌で摩り、(4)旃で回し、王の車に(5)仙人、(6)白い象、(7)白鳥、(8)獅子、(9)大岩、(10)山を繋ぎとめた、という夢を見た(Divy. 247-248)。

『ディヴィヤ・アヴァダーナ』では彼が夢を見たことを説くに留まるが、同様の話を扱う『過去現在因果経』(T. 189, iii 662c-623a)では、彼が自分の見た夢を解説してくれるよう普照仏に懇願すると、普照仏がその夢を説明する。ただし、この資料では夢の数が五となっているが、以下、その夢の内容とその意味を纏めると次の通り。

- (1) 大海に臥す。⇒ 生死大海(輪廻)の中にあ

る。

- (2) スメール山を枕にする。⇒ 輪廻を超越して涅槃を得る。
- (2) 海中のすべての生物が私の体内に入ってくる。⇒ 輪廻の世界において有情（一切の生きとし生けるもの）の帰依処となる。
- (2) 手で太陽を掴む。⇒ 智慧の光明が普く法界（宇宙）を照らす。
- (2) 手で月を掴む。⇒ 方便を以て輪廻の世界に入り、有情を教化して有情の悩みを取り除く。

このように各夢の意味を解説した後、普照仏は「この夢はお前が将来、成仏することを示している」と全体を纏めている。

#### ⑤その他

##### (a)シャーリプトラの母

根本有部律出家事には釈尊の高弟シャーリプトラの誕生に関して予知夢譚が語られる。

シャーリカー（シャーリプトラの母）は「松明を手を持った男が胎内を裂いて中に入る」という夢を見た。また彼女は「私は大きな岩山に昇っている。上空を飛んでいる。大勢の人々が私に礼拝している」という〔夢を見た〕。彼女はバラモンである〔夫〕ティシュヤに「私は各々然々の夢を見ました」と知らせた。夢〔分析〕の学習に精通していなかった彼は、夢〔分析〕の学習をしている他のバラモン達に「私の妻はこのような夢を見た」と知らせた。彼らは言った。「御師匠様、結構な夢でございますよ。『松明を手を持った男が胎内を裂いて中に入ってきた』と仰いましたが、それは彼女が息子を生むという意味です。その子は〔生後〕十六年してインドラの説明を了解し、一切の論者達を論破するでしょう。また『私は大きな岩山に昇っている。上空を飛んでいる。大勢の人々が私に礼拝している』と仰いましたが、それは彼が出家をして、感官の制御を成就し、自らの見解を打ち立てるという意味です」(MSV iv 22)

##### (b)シャーリプトラとマウドガリヤーヤナ（前生譚）

『ディヴィヤ・アヴァダーナ』第22章<sup>(28)</sup>には釈尊が過去世でチャンドラプラバ王として布施行に勤しんでいた話が見られる。彼は求められるものは何でも布施するという誓いを立てたが、そこに悪心を抱いたバラモンがやって来て王の頭を布施するように要求する。王は喜んで自分の頭を布施するが、そのバラモンがやってくる前に、王の忠実な家臣であるマハーチャンドラ（シャーリプトラの前生）とマヒーダラ（マウドガリヤーヤナ前生）は不吉な夢を見る。

さてある時、筆頭大臣マハーチャンドラは、チャンドラプラバ王の頭が煙のような姿の悪鬼達によって持ち去られてしまう夢を見た。そして目覚めた彼は恐怖し、恐れ、鳥肌を立てて、＜実際にチャンドラプラバ王の頭を求める者をやって来させてはならぬ。王は何でも布施され、何でも喜捨なさるお方だ。貧しき者・主なき者・困っている者・乞食者・〔何かを〕求める者達に、王がお与えにならないものは何もない＞〔と考えた〕。

（中略）筆頭大臣マヒーダラも、チャンドラプラバ王の家に置いてあった、ありとあらゆる宝石でできた衣がずたずたに引き裂かれてしまう夢を見た。そして見終わると、彼は恐れ戦き、動揺し、＜実際に〔誰かが〕チャンドラプラバ王の王権を絶やしたり、〔王の〕命を妨げるようなことがあってはならない＞〔と考えた〕(Divy. 318-319)。

これを占い師やバラモン達は「チャンドラプラバ王の頭を請い求める者がやってくる」前兆と見なし、事実そのようになっている。このあと、大勢の大臣達も夢を見てこのように考えている。

一万二千五百人の大臣達も、カロータパーニ夜叉によって、チャンドラプラバ王の四つの祭式場にあった傘・旗・幟は引き降ろされ、黄金のケトルドラムは壊される夢を見た。そして見終わると、彼らは恐れ戦き、動揺して、＜大地を保護し、慈しみを本性とし、大悲を具え、有情のことを慈しむチャンドラ

プラバ王に、無常性の力が近づいてはならない。何としても我々は大王と離れたり、分かれたり、離れ離れになってはいけない。閻浮堤が保護者なきもの、救済者なきものとなっ

てはいけない>と〔考えた〕(Divy. 319)。

ここでは夢の解釈はなされていない。なお、マハーチャンドラ、マヒンダラ、そして一万二千五百人の大臣達が、各自、夢を見た後で考えた内容は、ある意味でその夢を説明していると言える。

#### (c)アショーク王

『ディヴィヤ・アヴァダーナ』第27章<sup>(29)</sup>にはアショーク王の弟クナラに未来に関する予知夢譚があり、ここではアショーク王が、一夜に三度不吉な夢を見ている。最初の夢は二羽の鷺がクナラの眼を啄む夢、二番目はクナラが髪と髭を長くして町に入ってくる夢、三番目は〔自分の〕歯が抜け落ちる夢である。アショーク王はその夜が明けると、占い師達を呼んで「これらの夢は一体何の前兆なのだ」と尋ねると、彼らは「夢の中で、自分の歯が抜け落ちるのを〔見る〕人は、息子の眼の喪失と、息子の死とを見るであろう」と予言し (Divy. 410)、その通りのことが起こっている。クナラが二羽の鷺に目を啄まれ、また髪と髭を長くして町に入ってくるのは将来起こることをそのまま夢に見ているので、解釈の余地はないが、歯が抜け落ちる夢が「息子の死」と関連させて説かれている点は興味深い。

#### (d)ダナ王

『ディヴィヤ・アヴァダーナ』第30章<sup>(30)</sup>は釈尊の本生譚を扱う。その時、釈尊はダナ王の息子スダナ王子であった。王は地方の村で起こった反乱を制圧するために息子のスダナを派遣する。王子が村を鎮圧した時、ダナ王は次のような夢を見る。

さてちょうどその夜にダナ王は、一羽の秃げ鷹が飛んでくると、王の腹を裂き、腸を引きずり出し、その腸でかの都城を巻くと、七宝を家に運び込む夢を見た。そこで王は恐れ、戦き、愕然として、鳥肌を立て、素早く飛び起きると、大きなベットに座り込み、くこれがきっかけで、私が王位より落ちたり、生命を奪われたりせねばよいのだが>と頬

杖について物思いに耽った (Divy. 447-448)。

バラモンはこれを「王子が村を鎮圧した」ことと解釈している。

#### (e)クリキン王

伝説によると、釈尊の前には六人の仏がいたと言われ、その第六番目の仏、つまり釈尊の直前に現れた仏がカーシャパ仏である。その仏の時代にはクリキンという王が君臨していたが、ある時、彼は十の夢を見て、それが不吉な夢ではないかと思い、その夢の意味をカーシャパ仏に尋ね、彼がその夢を解釈するという話が『スマーガダー・アヴァダーナ』に存在する (SuA 41-42)。全文の引用は紙幅の都合により割愛し、夢の内容とその意味のみを略説する<sup>(31)</sup>。

(1) 一頭の象が窓から出て尻尾が引っかかる。

➡ 未来世に釈尊が現れ、悟りを開いた後に入滅するが、その時、バラモンや長者達は親族を捨てて出家するも、僧院で家庭の思いを起こす。

(2) 喉が渴いた者の後から井戸が追いかける。

➡ 釈尊の弟子達が信心なき長者達に法を説くが、彼らはそれを聞こうとしない<sup>(32)</sup>。

(3) 一升の真珠が一升の麦粉と交換される。➡

釈尊の弟子達が一升の小麦粉を得るために、優れた教えを公開する。

(4) 白檀が普通の木材の値段で売買される。➡

釈尊の弟子達が外道達の言葉を受け入れ、それを正法と同等に見なす。

(5) 発情期の象が子象達によって怯えさせられる。➡

釈尊の放逸な弟子達が、戒を身につけた正しい弟子達を追い出す。

(6) 花が咲き、実が生った庭園が盗賊達に奪われる。➡

修行の足りない釈尊の弟子達が花や果実を僧院から奪い去り、親族達に与える。

(7) 汚物にまみれた一匹の狼が他の狼達に汚物を塗り付ける。➡

修行の足りない釈尊の弟子が罪に陥り、信仰心ある弟子達に不実の罪をかぶせる。

(8) 狼の灌頂が行われる。➡

その時には、器官に欠陥のある者達でさえも王になる。

(9) 一枚の布が十八人の人々によって引っ張ら

れても裂けない。⇒ 釈尊が入滅した後、彼の教えが十八に分裂するが、解脱という布を引き裂くことはできない。

- (10) 大群衆が一箇所に集まって論争し対立することによって時を過ごす。⇒ 釈尊の教えにおいて、放逸な弟子達が論争し対立することで、釈尊の教えを隠没させてしまう。

このように、クリキン王の十夢譚は、全体のトーンとして釈尊亡き後の仏教が退廃し荒廃する予兆として説かれているのが分かる。またこの話は、同じコンテキストで『五分律』(T. 1421, xx 172c) にも見られるが、その夢の内容とその説明は『スマーガダー・アヴァダーナ』と異なるので、藤田 (1997: 14-15) の和訳を参考に、その内容を纏めると次の通りである。なおこちらは夢の数が十一となっている。

- (1) 小さい樹に花が咲いた。⇒ 未来世に釈尊が出現するが、その時代の人間は三十歳で白髪になる。
- (2) 華が直ちに果実となる。⇒ その時代の人間は二十歳で子供を産む。
- (3) 子牛が農地を耕して、成牛はそれを住視する。⇒ その時代には子供が家事を取り仕切り、父母は家事に関して自由がない。
- (4) 三つ並んだ釜で飯を炊いていると、両側の釜の米が跳んで互いの釜の中には入るけれども、真ん中の釜には米が落ちない。⇒ その時代に富める者同士は互いに施し合うけれども、貧しい者は施しを得られない。
- (5) 双頭の駱駝が草を食らう。⇒ その時代に王の群臣は王から俸給を得ながら、さらに民衆のものを搾取する。
- (6) 母馬が子馬の乳を飲む。⇒ その時代の母親は娘を嫁がせた後、かえって娘から食を求める。
- (7) 金の鉢が空中に跳ぶ。⇒ その時代に、雨は時期はずれに降り、また普くゆきわたらない。
- (8) 野狐が金の鉢の中に尿をする。⇒ その時代の人民は、ただ金持ちと結婚して氏素性を省みない。
- (9) 猿が金の床の上に坐っている。⇒ その時

代の国王は非法を以て政治し、暴虐無道である。

- (10) 牛頭栴檀を腐った草と同価で売る。⇒ その時代の釈種沙門は利養を貪り、在家者に法を説く。
- (11) 水の中央が濁っているのに、四辺は清らかである。⇒ その時代の仏法は中央の国において衰滅するが、辺地の諸国ではかえって盛栄する。

なおこちらでは、釈尊在世当時の荒廃ぶりが予知夢によって説明されている。

#### (f) コーサラ国の王

『ジャータカ』第77話 (Ja. i 334-343) には、コーサラ国王が自分の見た十六の夢の意味を釈尊に説明してもらう話がある。全文の引用は長くなるので、これも夢の内容とその説明の要点のみを紹介する<sup>(33)</sup>。

- (1) 四頭の黒牡牛が「戦おう」と四方から王庭にやってくる。その闘いを見ようと多くの人が集まり、今にも闘おうとして吠えたり、叫んだりしていたが、結局は戦わずに立ち去った。⇒ 未来世に世界が衰退して飢饉となった時、四方から雲が湧き起こり、今にも雨が降りそうになるが、雨は降らずに雲は散ってしまう。
- (2) 幼樹と灌木とが大地を破って二尺ほど伸びただけで花が咲き、実を結ぶ。⇒ 未来世に人々の愛欲は激しくなり、適齢とならない若い娘が、花が咲くように受胎し、実が生るように出産する。
- (3) 牝牛がその日生まれた子牛の乳を飲む。⇒ 未来世には人々が年長者を敬わなくなり、老人は孤独で独立できず、子供の機嫌を取って生活するようになる。
- (4) 荷車には大きな牡牛は繋がれず、幼牛が繋がれたため、荷車は動かず、立ち止まっていた。⇒ 未来世に卑小な王は有能な大臣を登用せず、無能な者達を重用するため、無能な者達は仕事の重荷から逃げ出し、有能な大臣も志気を失って仕事が停滞する。
- (5) 両側に口のある馬がおり、その馬に両側から馬草を与えると、馬は二つの口で食べる。



- ⇒ 未来世には愚かな王が法を守らない悪人に裁判を任せると、その悪人は被告と原告から賄賂を受け取る。
- (6) 多くの人が高価な黄金の鉢を拭き淨め、小便をするようにと老いたジャッカルの前にそれを差し出すと、ジャッカルはそこに小便をする。⇒ 未来世には由緒は正しくとも法を守らない王が良家の息子に名誉を与えず、賤しい生まれの者達を重用し、生活ができなくなった良家の者達は賤しい者達に娘を与えるようになる。
- (7) 一人の男が縄をよっては投げていると、彼の坐っている椅子の下に一匹の飢えた牝ジャッカルが彼の知らない間にそれを食べる。⇒ 未来世には女性が色欲に耽り、酒を飲み、家の仕事をせず、家の財産を食い潰す。
- (8) 王宮の入り口に水が一杯入った瓶があり、その周りには多くの空の瓶があったが、四つの階級の人々が周囲から水瓶で水を運び、一杯になっている瓶にのみ水を入れようとし、空の瓶には目もくれなかった。⇒ 未来世に世界が減じる時、王はすべての人民を自分のためだけに働かせるので、彼らは王の蔵を満たそうとするが、自分達の蔵には目もくれなくなるだろう。
- (9) 蓮華に覆われた池の岸辺は浅瀬で水は澄んでいたので、人や動物はそこで水を飲んだが、中央は深くて水は濁っていた。⇒ 未来世には非道な王の様々な圧政に苦しめられた人々が町や村を捨てて、辺地に行って生活するようになる。
- (10) 一つの鍋でご飯を煮ると、米が別々であったかのように三つに別れ、一部は柔らかくなり過ぎ、一部は固すぎ、一部はよく煮えていた。⇒ 未来世に、王は法を守らなくなり、それによって人々や神々までもが法を守らなくなる。すると、天候が不順になり、一王国内で獲れる穀物が一様でなくなる。
- (11) 高価な梅檀の木を、腐ったバターと交換する。⇒ 未来世には破廉恥な修行僧が生活必需品に貪心を起こし、それを手に入れる

ことを目的として説法するであろう。

- (12) 空の瓢箪が水に沈んでいる。➡ 未来世には法を守らない王が良家の息子達にはではなく、生まれの悪い者達に名誉を与え、彼らの言葉が定着し、僧団でも悪い僧の言葉が善い僧の言葉に代わって用いられるようになる。
- (13) 尖塔のように大きく硬い岩石が舟のように浮かんでいる。➡ 未来世には法を守らない王が良家の息子達にはではなく、生まれの悪い者達に名誉を与え、善き人の言葉は確立されず、僧団においても正しい僧の言葉は安立しない。
- (14) 小さな蛙が大きな毒蛇に飛びついて、その肉を噛み切っては食べていた。➡ 未来世にこの世が滅ぶ時、人々は貪欲が激しくなって煩惱のままに従い、若い妻の思い通りになり、女性が権力を振り回すであろう。
- (15) 十の悪徳を有する烏が黄金の羽を持つ黄金鳥を従者にする。➡ 未来世に王が無力となった時、良家の息子達にはではなく、身分の低い者達に権力を与えるので、身分の低い者達が良家の息子達に仕えることになるだろう。
- (16) 山羊が豹を食べ、狼が山羊を畏れて藪の中に逃げ込む。➡ 未来世に法を守らない王が家柄の悪い者達を重用するので、良家の人は困窮し、穏和な修行僧は悪徳修行僧に苦しめられるであろう。

このように、先に見た『五分律』の内容と重なるものもあるが、未来世に時代が退廃する際の予知夢がここで説かれている。

(g) ヴェーデーハ王

『ジャータカ』第546話の用例。過去世でヴェーデーハ王が国を治めていた時、王には四人の政治顧問がいた。さてある時、釈尊は菩薩として王妃の胎内に入った時、王は次のような夢を見る。

王宮の中庭の四隅に四つの火の塊が、城壁ほどの高さに燃え上がっていて、それらの真ん中に螢火ほどの火があった、その刹那に四つの火の塊を飛びこえて、梵天界ほどの高さにまで上がって、全世界を照らし出

した。〔そのために〕大地に落ちている芥子粒すらもはっきりと見えた。神々とともなる世の人々は華鬘や香などで供養をした。大勢の人々は光の中を歩き回っても毛孔すらも熱さを感じなかった (Ja. vi 330)。

この夢を、政治顧問の一人セーナカは次のように説明する。

「大王様、我々四人の賢者を凌駕し、顔色をなくさせるほどの第五の別の賢者が、あなた様のところに現れるでしょう。我々四人は四つの火の塊の如くですが、〔その〕中間に生じた火の塊の如く第五の賢者が現れるでしょう。〔彼は〕神々とともなる人間界において、無双・無類の先導者であります」 (Ja. vi 330)<sup>(34)</sup>

#### (h) マッディーとサンジャヤ王

『ジャータカ』第547話は、妻子をも布施して布施行に邁進するヴェッサンタラ王子（釈尊の前生）の物語である。国の宝である象を布施したために、民衆の反感を買い、国から追放されて王子は妻と二人の子供を連れて山に隠遁する。後に王子はある婆羅門に愛しい二人の子供さえも布施してしまうことになるが、その前夜、妻のマッディー（ヤショードラーの前生）は次のような不吉な夢を見る。

朽ち葉色の衣を纏い、耳に赤い花飾りを着けた黒い男が、手に凶器を持って脅しながらやってくる。草庵に入るや、マッディーの束ね髪を掴んで引きずり、地に仰向けに倒し、泣き叫ぶ女をよそに、両眼を抉り出し、両腕を切り、胸を裂いて、血しぶきをたてている心臓を持って去っていく (Ja. vi 540)。

この夢を王子に告げると、王子は「明日、物乞いがきて、子供たちを乞うだろう。私の施しが完成する時が来た」(Ja. vi 541) と知るが、彼女を心配させないために彼女には嘘をつき、真実を告げていない。王子は二人の子供を婆羅門に布施するも、最後は無事に二人とも元の国に戻るが、その明け方、サンジャヤ王（シュッドーダナの前生）は次のような夢を見る。

王が法廷に坐っていると、一人の男が二本の蓮華を持ってきて王の手に載せる。王が

両耳に着けると、その花粉が零れて王の腹の上に落ちる (Ja. vi 574)。

この夢を婆羅門達に告げると、彼らは「長いあいだ出ていたかれの一族が戻ってくるだろう」(Ja. vi 574) と占っている<sup>(35)</sup>。

#### (i) ダナンジャヤ王

『ジャータカ』第545話の用例。ダナンジャヤ王（アーナンダの前生）にはヴィドゥーラ賢者（釈尊の前生）という大臣がおり、夜叉に捕らえられてしまうが、賢者は夜叉を教化し、最後には再び王のもとに帰ってくるが、その日の朝早く王はこのような夢を見る。

王宮の門のところに、幹が智慧、枝が道徳、果実が牛からとれる五つのもの<sup>(36)</sup>でできていて、美しい飾りをつけた象や馬にとりかこまれた大樹が立っていた。沢山の人がその木を合掌して拝んでいる。すると、赤い服を着て、赤い耳飾りを着けた黒い男が、武器を手にとってきて、大勢の人が泣き叫ぶのもかまわず、その木を根元から切り倒して運び去ってしまった。しばらくすると、また運んできて、もとの場所に置き、立ち去った (Ja. vi 324)<sup>(37)</sup>。

このような夢から、王自身は「賢者が今日、戻ってくる」と解釈し、その通りになっている。

#### (j) サムッダジャー

『ジャータカ』第543話の用例。釈尊が過去世で龍の子であった時、婆羅門に捕らえられてしまうが、ちょうどその同じ日に彼の母サムッダジャーは次のような夢を見る。

赤い眼をした色の黒い男が刀で彼女の腕を切って、血が滴っているのもかまわず、もち去っていく (Ja. vi 186)<sup>(38)</sup>。

このような夢を見た彼女は、我が子が蛇使いか何かに捕らえられてしまったことを察知している<sup>(39)</sup>。

## (2) 夢枕

### ① 神

『ディヴィヤ・アヴァダーナ』第8章<sup>(40)</sup>には釈尊が過去世で隊商主スプリヤとして菩薩行専心していた話が見られる。彼は「一切の有情を財で

満足させる」という誓いを実行しようとするが、商用の旅に出る度に襲撃される盗賊の望みさえ叶えられないために落ち込み、眠ってしまうと、ある神が夢枕に立ち、こう言って彼を励ます。

「隊商主よ、お前はがっかりすることはない。お前の誓願が叶えられるからだ。大隊商主よ、実にこの同じ閻浮堤にはバダラ島と呼ばれる大都市があり、人間ならざる者達が住んでおり、誉れ高い者達によって支配されているが、そのバダラ島には一切有情の様々な願いを叶える最高の宝がある。もし大隊商主がバダラ島への航海を成功させれば、この大いなる誓いを成就することができよう。実にこのような大いなる誓いはシャクラやブラフマン等〔の神〕でさえも成就し難きものだ。人間であればなおさらである」(Divy. 102)

バダラ島への行き先を聞き忘れたことを後悔して再び居眠ると、またその神が現れ、詳細にバダラ島への行き先を彼に告げるのである。眠りから醒めた隊商主スプリヤは神の言葉に励まされ、バダラ島に向かうが、あまりに困難な行程のため、挫折しそうになるが、そこでも神が夢枕に立って彼を励まし、最後にはその宝石を手に入れることに成功している。

## ②先祖

『ディヴィヤ・アヴァダーナ』第19章<sup>(41)</sup>には、死んだ父が夜叉に生まれ変わり、息子達の夢枕に立って指示を出すという話が見られる。

ラージャグリハとチャンパーとの中間に徴税所があったが、そこの徴税官が死んでしまった。彼は邪悪な夜叉に生まれ変わり、息子達の夢枕に立った。

「倅達よ、お前達はこの場所に夜叉の祠堂を建立し、そこに鈴を括り付けてぶら下げておけ。誰かが税を払わずに商品を持ち出そうとすれば、その者が戻ってきて税を払うまでその鈴は鳴っているだろう」

彼らはこの夢を親戚や親類の者達に知らせると、日・時・時刻を選んで、その場所に夜叉の祠堂を建立し、そして鈴を括り付けてぶら下げた(Divy. 275-276)。

用例の数としては少ないが、このように神や亡き父など、夢枕の用例はこの世ならざる異界<sup>(42)</sup>の存在者とのコミュニケーションの場として夢が機能していることが分かる。

## 3. 小結

以上、インド仏教説話に散見される夢の用例を、予知夢と夢枕という二つの側面から紹介してきた<sup>(43)</sup>。夢枕の用例からは、夢が「この世の人間」に「この世ならざる存在」が現れてコミュニケーションする場として機能していることが窺われる。つまり、夢は異界とのコミュニケーションの場と考えられるのである<sup>(44)</sup>。とすれば、先に見た予知夢の話も、未来を「この世ならざるもの」と理解すれば、夢を「未来という異界とのコミュニケーションの場」として把握することが可能であろう。夢は時間的には過去や未来といった異界と繋がり<sup>(45)</sup>、空間的には神や先祖と言った異界と交信する場と言える。夢は「今／ここ」を基点にした、異界と交信する通路とも言えよう。

ここで取り上げてきた予知夢の用例の幾つかは、その因果関係があまりに明白すぎて、無意識のレベルから自然に立ち上がってくる実際の夢を客観的に描写したと言うよりは、物語の枠や筋に填め込むために意識のレベルで意図的に捏造され、粉飾されたものもあるに違いない。しかし、そうだとした場合、古代インド人がある夢をそのように意識のレベルで捏造したという事実から、その意識の背後に潜んでそのように意識を操作した無意識の働きに注目し、そこから古代インド人の精神性を考察したり、ひいては普遍的な人間の心理を導き出すことも可能であろう。またこれらの予知夢譚は古代インドの民間伝承を反映しているとも考えられるから、これらの用例を手がかりに、古代インド人の民族性や文化的背景を考察したり、さらには人間の文化の普遍性や特殊性を探る糸口になる可能性も秘めている。

詳細な夢の分析や、その文化的な意味に関しては専門家に任せるとして、ここでは従来取り

上げられることが少なかったインド仏教説話の夢の用例を紹介し、若干の考察を試みた。本稿が仏教学以外の学問の俎上に載せられ、新たな視点からインド仏典に見られる夢に光が当てられることを夢みて本稿を閉じることにする。

## 引用文献

- 太田 清史 (1997) 『「釈尊伝」講話 (光華叢書②)』京都: 光華女子大学・短期大学真宗文化研究所。
- 梶山雄一他 (1985) 『ブッダチャリタ (原始仏典十)』東京: 講談社。
- 河合 隼雄 (1987) 『明恵 夢を生きる』京都: 京都松柏社。
- 小坂 国継 (1999) 『善人がなぜ苦しむのか: 倫理と宗教』東京: 勁草書房。
- 佐々木 閑 (2000) 『インド仏教変移論: なぜ仏教は多様化したのか』東京: 大蔵出版。
- 定方 晟 (2000) 『須弥山と極楽 (講談社現代新書 330)』東京: 講談社。
- 瀬戸内寂聴 (2002) 『釈迦』東京: 新潮社。
- 高石 浩一 (2002) 「佛教説話に見る母子相姦の変遷」『人間学研究 (京都文教大学人間学研究所)』2, 17-27。
- 中村 元 (1964) 『ミリンダ王の問い 3: インドとギリシアの対決 (東洋文庫 28)』東京: 平凡社。
- 中村 元 (1984) 『ブッダのことば: スッタニパータ』東京: 岩波書店。
- 中村 元 (1987a) 『ジャータカ全集 2』東京: 春秋社。
- 中村 元 (1987b) 『ジャータカ全集 10』東京: 春秋社。
- 中村 元 (1991) 『ジャータカ全集 9』東京: 春秋社。
- 中村 元 (2000) 『新編: ブッダの世界』東京: 学研。
- 並川 孝儀 (1988) 「初期仏教経典における buddhāunbuddha の意味」『日本佛教学会年報』53, 33-46。
- (1997) 「ラーフラ (羅喉羅) の命名と釈尊の出家」『佛教大学総合研究所紀要』4, 17-34。
- 平岡 聡 (1999) 「仏典に説かれる「母子相姦」説話: インド原典とその中国・日本の変容」『人間学研究 (京都文教大学人間学研究所)』1, 23-36。
- (2002) 『説話の考古学: インド仏教説話に秘められた思想』東京: 大蔵出版。
- 藤田 宏達 (1970) 『原始浄土思想の研究』東京: 岩波書店。

藤田 祥道 (1997) 「クリキン王の予知夢譚と大乘仏説論: 『大乘莊嚴經論』第1章第7偈の一考察」『インド学チベット学研究』2, 1-21。

カール・ベッカー (1992) 『死の体験: 臨死現象の探究』京都: 法蔵館。

外薗 幸一 (1994) 『ラリタヴィスタラの研究 (上巻)』東京: 大東出版社。

## 略号

- AN: *Āṅguttara-nikāya*, 5 vols., ed. E. HARDY, London: Pali Text Society, 1979-1995 (First Edition: 1885-1900).
- Bc: *Buddhacarita*, ed. E. H. JOHNSTON, Lahore, 1936.
- Divy: *Divyāvadāna*, ed. E. B. COWELL and R. A. NEIL, Cambridge, 1970 (First Edition: 1886).
- Ja: *Jātaka*, 6 vols., ed. V. FAUSBØLL, London: Pali Text Society 1962-1964 (First Edition: 1877-1896).
- Lv: *Lalitavistara*, ed. S. LEFMANN, 2 vols., Halle, 1902.
- MSV i-iv: *Mūlasarvāstivāda vinaya*, ed. N. DUTT, 4 vols., Srinagar and Calcutta, 1942-1950.
- Mv: *Le Mahāvastu*, ed. É. SENART, 3 vols., Paris, 1882-1897.
- Sbh: *The Gilgit Manuscript of the Saighabhedavastu*, 2 vols., ed. R. GNOLI, Roma, 1977-1978.
- Sn: *Suttanipāta*, ed. D. ANDERSEN and H. SMITH, London: Pali Text Society, 1965 (First Edition: 1913).
- SuA: *Sumāgadhāvadāna*, ed. Y. IWAMOTO, Kyoto: Hōzōkan, 1968.
- T: *Taishō Shinshū Daizōkyō*, ed. J. TAKAKUSU and K. WATANABE et al., 55 vols., Tokyo, 1924-1929.

## 注

- (1) その内容に関しては本誌に掲載されているので、是非参照されたい。
- (2) 人間学研究所の共同研究という形で、すでに数年前に「仏教説話と臨床心理学」というプロジェクトを立ち上げ、インド仏教説話に見られる母子相姦の話を考察した。そこではまず平岡 (1999) がその説話のインド原典の翻訳とその中国・日本の変容の経緯を考察し、それに対して高石 (2000) が、その説話を臨床心理学的見地から考察した。
- (3) インド仏典と一口に言っても、サンスクリット語やパーリ語で残された原典から、チベット訳や漢訳に至るまでその数は膨大であり、そのすべてをここで取り上げることはできない。よってここでは初期仏教から部派仏教のインド原典で、従来その和訳がほとんど知られていない資料を中心に用例を紹介するので、大乘仏教の資料はここでは取り上げない。

- (4) この話は時代と地域とを異にする両者が夢を介して師資相承を果たしているの、実際に法然が見た夢なのか、あるいは法脈を重視した後代の弟子達が捏造した話なのかは不明である。なお、これから取り上げる釈尊と同じように、法然の懐妊に関しても母の不思議な夢の話が伝えられ、それによれば剃刀を飲み込む夢を見て懐妊したと伝えられている。
- (5) 本来 buddha は普通名詞で、真理に目覚めれば誰でもブッダになりうるが、日本で「お釈迦さん」として知られる仏教の開祖ガウタマ・シッダールタ (Gautama Siddhārtha) は真理に目覚めて一番最初に「ブッダ」になったから、この語は固有名詞化されて、「ブッダ」と言えば、お釈迦さんのことを意味する場合もある。英語ではこれを a Buddha (普通名詞) と the Buddha (固有名詞) で区別している。以後、本稿において固有名詞のブッダを意味する時は「釈尊」という呼称を用いることにする。なお最初期の仏典では、buddha はまだ固有名詞化されず、仏弟子の中にも buddha と呼ばれていたことが並川 (1988) によって論証されているが、教団の組織化に伴い、buddha は固有名詞化の道を辿った。そして再び大乘仏教になると buddha は普通名詞化され、真理に目覚めた者は誰でも buddha に成りうる事が強調されるようになる。Cf. 平岡 (2002: 326-346)。
- (6) たとえば初期經典には次のような記述が見出せる。「比丘達よ、如来・阿羅漢・正等覚者 (釈尊のこと) が正しく目覚める前、まだ目覚めていない菩薩であった時に、五つの偉大な夢を見た」(AN iii 240)  
 釈尊は悟りを開く前は「菩薩 (悟りを求める人)」と呼ばれるが、この用例の下線部からも分かるように、釈尊が夢を見たのはあくまで「悟りを開く前」、すなわち真理に「目覚める」前であったことを強調している。なおこの用例の内容は後ほど取り上げる。
- (7) しかし、仏典に釈尊の夢の用例が見出せないからと言って、現実生活において釈尊が夢を見なかったということにはならない。釈尊も人間である以上、実際は夢を見ていたに違いない。なお、現存の仏典に基づきながらも、ドグマに拘泥せず、作家としての自由なイマジネーションを駆使して近年出版された瀬戸内 (2002: 12, 77, 167) の小説によれば、悟りを開いた釈尊も夢を見る存在として描かれている。
- (8) 大乘仏教の興起に関する従来の説および新しい見解に関しては佐々木 (2000) を参照されたい。
- (9) インドの浄土教における「見仏」については藤田 (1970: 553-556) が詳しい。
- (10) このような考え方の背景には、仏の力量に関する配慮がある。つまり、仏の力量は優れているから、仏のなすべき仕事 (有情の教化など) は他の仏の力を借りずとも、一人で充分遂行できるという考えが背景にあるのである。
- (11) これは世界が三千あるというのではなく、千の三乗を意味するので、十億の世界になる。
- (12) 無論、釈尊さえ後代の人間にとってみれば、直接見たことのない過去の人であるから、篤信者にとっては、瞑想であれ夢中であれ、実際の釈尊の形相を一目見たいと思っていたに違いない。そのような気持ちを持っていた仏弟子が後代にいたことを窺わせる説話も存在する。詳しくは平岡 (2002: 349-351) を参照されたい。
- (13) 浄土教を臨死体験という観点から考察した研究としてベッカー (1992) がある。
- (14) 仏伝と一口に言っても、体系的に纏められたものから断片的なものまで様々であり、またその内容も史実に近い内容を伝承しているものから、神格化された釈尊の事跡を縷々綴るものまで多種に及ぶ。なお、仏伝の資料に関しては、中村 (2000) が優れており、かつ非常に便利である。ここでは事跡別にそれを記述する文献が網羅されている。
- (15) 『ブッダ・チャリタ』は「身ごもる前、妃は夢の中で白い象が自分の身体に入ってくるのをみた。けれども妃はそれで痛みを感じることはなかった」(BcI-4) とし、『ラリタ・ヴィスタラ』は「安楽なる寝台に眠りたるマーヤー妃は、かくの如く夢を見たり。雪の如き銀白色の、六牙ある、端正なる足、美しき腕、鮮紅色の頭を有する、最勝なる象が、四肢・骨節は金剛の如く堅固なるも、足取り優雅に、胎内に入らんとせり」(Lv 55) とする。なお和訳はそれぞれ梶山 (1985: 3) と外園 (1994: 789) に依った。
- (16) 古代インドの世界観によれば、円形をした盤の中央に須弥 (スメール) 山が、そしてその東西南北にそれぞれ島があると考えられ (四洲)、当時のインド人はその南にある閻浮提洲 (ジャンブドゥヴィーパ) に住んでいると考えていた。詳しくは定方 (1973) を参照。
- (17) この他にも Mv. (ii 205 ff.) には釈尊に記別を受けた燃灯仏が誕生する際の描写にこれと同内容の説話が見られるが、これは釈尊の仏伝を下敷きにしたものなのでここでは取り上げない。
- (18) 常人が持ち合わせない三十二の身体的特徴で、これを有するのはブッダが転輪王と考えられていた。転輪王とは当時のインド人が考えた空想上の理想の王である。転輪聖王とも言う。

- (19) ブッダにはたくさんの異名があり、「如来の十号」と言われるように、全部で十あるとされるが、その内容や数に関しては若干の異同がある。
- (20) さて、仏教学と臨床心理学とを学んだ太田 (1997: 37) はこの話を次のように分析する。  
「夢の性格からいいますと、白い象というものについての象徴的な解釈ができると思います。象は、C. G. ユングの分析心理学では、グレートマザーの象徴であるというのですが、母親の役割（マターナルロール）というもの、それを非常に大きく描きだしたときに象のイメージがよく出てくるということです。ですから、インドなどではそれが非常によく出てきます。しかもそれが白いわけで、白は聖性を意味しますが、発想を豊かにすると「白い」という言葉の中にはやはり受胎の瞬間といえますか、そういう意味も恐らく込められていると思います。そういう深い象徴的な意味が、白象が胎内に入るという夢に象徴されているのだらうと思います」
- (21) 仏教の世界観で、我々が止住する三つの迷いの世界である。下から、欲界（欲の盛んな世界）、色界（欲を離れた物質の世界）、無色界（物質を越えた精神世界）の三つを言う。我々人間は最下位の欲界に属している。
- (22) この後、釈尊も五つの夢を見るが、これはこの後、別出する。
- (23) 古代インド人は月蝕という天体現象を、悪魔が月を飲み込むと考えたようだ。そしてこの「ラーフ」に由来するのが、釈尊の一人息子「ラーフラ」である。どうしてこのような命名がなされたかについては並川 (1997) の興味深い研究があるので、是非とも参照されたい。
- (24) この後で紹介する説話にもあるが、釈尊およびその他の仏が予知夢の意味を説明するという話が散見される。しかし、古層の經典では「師は言われた。『瑞兆の占い、天変地異の占い、夢占い、相の占いを完全にやめ、吉凶の判断をともにすてた修行者は、正しく世の中を遍歴するであろう』」(Sn 360) とか、「わが徒は、アタルヴァ・ヴェーダの呪法と夢占いと相の占いとを行ってはならない。鳥獣の声を占ったり、懷妊術や医術を行ったりしてはならぬ」(Sn 927) と説かれ、本来、釈尊は出家者に修行とは直接関係のない所謂「夢占い」等の行為を禁止していたと考えられ、このような考え方は他の經典にも散見される。なお、Sn の和訳は中村 (1984: 76, 201) に依る。
- (25) 理想の境地（涅槃）に至るための八つの実践道で、正見・正思・正語・正業・正命・正精進・正念・正定の八つを言う。
- (26) これには様々な伝承があるが、基本的なプロットは次の通りである。遠い昔に燃灯仏が泥濘を歩こうとされた時、釈尊の前生である青年バラモンが自らの弁髪を解いて泥濘に敷き、燃灯仏の足を汚さないようにしてそこを通過させたが、その行為により、燃灯仏は青年バラモンに、将来彼がブッダになることを予言する。この予言を記別といい、その記別を授けることを授記という。
- (27) 平岡 (2002: 55-57).
- (28) 平岡 (2002: 59).
- (29) 平岡 (2002: 63-64).
- (30) 平岡 (2002: 66-67).
- (31) これに関しては藤田 (1997) の研究に詳しい。
- (32) Skt. 原典の読みには不明な点があることを藤田 (1997: fn 16) は指摘している。ここでは、そこで紹介されている山口・舟橋の訂正に従った。
- (33) 詳細を知りたい方は中村 (1987a: 24-34) を参照。
- (34) 和訳は中村 (1988: 2) を参考にした。
- (35) 和訳は中村 (1987b: 209, 239) を参考にした。なおこの話は、小坂 (1999: 198-209) が、旧約聖書『創世記』のイサクの献供と共に、宗教と倫理という観点から論じている。
- (36) 中村 (1991: 283, fn 64) の注によると、牛乳、ギー、カード、バターミルク、バターの五つとする。
- (37) 和訳は中村 (1991: 262) を参考にした。
- (38) 和訳は中村 (1991: 173-174) を参考にした。
- (39) 今までの夢の用例は、時間の間隔に長短の違いはあるものの、未来に起こる出来事を間接的に知らせているものであったが、ここでは夢が現在の状況を反映している点が異なる。しかし、これから見る「夢枕（神や先祖が夢を通じて直接何らかの指示を与える）」とも性質が異なるので、ここでは一応、予知夢に分類しておく。
- (40) 平岡 (2002: 49-50).
- (41) 平岡 (2002: 57-58).
- (42) 異界と言っても、ここで注意を要するのは、現在の我々と当時の人々とが感じていた異界との距離感は同じではないという点である。科学が高度に発達し、意識がすべての中心にあるような現代、異界とは文字通り「この世とは異なる世界」であり、現世と隔絶した世界であるが、科学もなく、意識も今日のように万能とは考えられていなかった当時、その境界は今よりは曖昧であり、確固たる境界線が汚[か]れてはいなかったであろうと推察される。しかしそれでもなお、先祖や神との交信がまったく同じ次元で無境界であったわけでもないであろうから、とりあえず当時の場合でも現世ならざる世界を「異界」という言葉で表現する。

- (43) 夢に関する話は、ここで取り上げた他にも、見た夢が必ず実現する王妃の話が根本有部律破僧事 (Sbh. ii 96 ff.) に、また娼婦と交わった夢を見て、その代金を娼婦に要求される男の話が『マハー・ヴァストゥ』 (Mv. iii 33 ff.) に見られるが、極めて断片的な話なので、本論では取り上げなかった。またここで取り上げたのは、説話で説かれる具体的な夢の事例であったが、『ミリンダパンハ』では夢が哲学的に分析されているので、興味のある方は中村 (1964: 67-72) の和訳を参照されたい。
- (44) とは言え、夢を通じなければ異界と交通できないというわけではない。説話の中には現世に神が現れて人間と直接コミュニケーションをとるという説話もあるし、また人間が異界（たとえば餓鬼の世界や地獄の世界）に迷い込み、異界の存在者と話をするという説話もある。
- (45) ここで取り上げた用例は、予知夢譚で見たように、時間的には未来との繋がりしか確認できなかったが、夢は当然、心理臨床の現場における夢分析で過去の出来事と深い繋がりを持っていることは多言を要しない。